

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

緊急特別号 第 309 回 なにくそ！豚インフルエンザ！！

2009.4.29

豚インフルエンザが、えらいことになっている。世界保健機関(WHO)は、日本時間4月28日、パンデミック(大流行)レベルをフェーズ3からフェーズ4に引き上げた。このニュースをNHKは非常事態宣言の如く、連続して流していた。このことは一体、どんな意味をなすのだろうか？

フェーズ4とは、「ヒトヒト感染」が既に封じ込み不可能な段階であり、感染拡大の危険性を示唆するものである。WHOのフェーズ4が宣言された後は、短時間で感染が拡大し、世界的な流行となる可能性がある。4月28日8:30現在、日本において、豚インフルエンザの感染者に関する報告はないが、このウイルスには潜伏期間があるので、くれぐれも注意したいところである。

そもそもインフルエンザは、細菌により感染するのではなく、ウイルスによるものである。従って抗生物質は全く効かず、始めて世に出たウイルス(新型ウイルス)には、人は全く免疫力を持たない。新型インフルエンザウイルスとは、特に鳥類にのみ感染していた鳥インフルエンザウイルスが、当初は偶発的に人に感染していたものが、遺伝子の変異によって、人の体内で増えることができるようになり、さらに人から人へと効率よく感染するようになったものである。

特に「H5N1型ウイルス」は「高病原性鳥インフルエンザ」と言い、人に感染した場合、致死率60%以上と圧倒的に死亡率が高い。10～40年に一度発生すると言われているが、確たる論拠はない。強毒型が多く、比較的冬に蔓延する、通常インフルエンザのような季節性は無く、当然免疫は無い。弱毒型のインフルエンザの疾患は呼吸器に限局するが、強毒型は全機能に傷病の恐れがある。更にこの新型ウイルス、40歳以下の若年層に罹患率が高く、死亡率も高いという傾向があり、益々厄介なものであると言っていい。

今回の豚インフルエンザは、全くの新型である。つまり、この新型ウイルスは、人類にとっては未知のウイルスであり、人は免疫を持っていないため、容易に人から人へ感染して拡がり、急速な世界的大流行(パンデミック)を起こす危険性がある。冒頭における、世界的にも、国内的にも異常なほどの緊張感は、このような背景があった。

1918年、今から約90年以上前、突如現れた新型ウイルス「スペイン風邪」は、全世界で人口の25～30%が発症し、4,000万人が死亡したと推計されている。当時の記録から、大流行が起こると多くの人が感染し、医療機関は患者であふれ、国民生活や社会機能の維持に必要な人材の確保が困難になるなど、様々な問題が生じることが考えられている。スペイン・インフルエンザでは、世界中の流行に6～9か月の期間を要したと伝えられているが、現代社会では、人口の増加や都市への人口集中、航空機などの交通機関の発達などから、大流行(パンデミック)に至るまで、何もしないと4～7日と言われている。

現時点で、豚インフルエンザの詳細な解明はできていない。が恐らく、H5N1型ウイルスではなく、H1N1の亜型との予測が主流である。たぶん弱毒型で、従って「タミフル」が効くと言われている。発症から48時間以内に服薬すれば、それほど危険性は無いとも言われている。今現在日本は、2,800万人分、人口の22%分の「タミフル」の備蓄がある。パンデミックワクチンの原液も保存されていると聞く。第2波の異常感染が起こらない限り、パニックにはならない筈である、そのような冷静な情報を告知していく必要があるだろう。

また、豚インフルエンザは「飛沫感染」である。飛沫感染とは感染した人が咳やくしゃみをすることで排泄する、ウイルスを含む飛沫(5ミクロン以上の水滴)が飛散し、健康な人がそれを吸い込み、ウイルスを含んだ飛沫が粘膜に接触することによって感染する。ところが咳やくしゃみによる飛沫は、せいぜい飛んで2m、従って2m以上離れていれば、絶対、直接感染しないことになる。空気感染や接触感染の方が、厄介かもしれない。

だからトンカツを食べても、しょうが焼きを食べても、ホルモン焼きでも、絶対感染しない、ましてや、71 以上加熱すれば、ウイルスは死滅する。だから、豚肉関連業者に風評被害を与えてはならない。

問題は間接感染である。飛沫をつけたままのマスクを安易に口に含む、自分の口元に当てた側でない、反対側である。せっかくマスクをしていても、感染する恐れがある。沈静化するまでしばらくは、人ごみの中に行かない、外出しない心構えが必要かもしれない。

仕方なく外出時はマスク、帽子、ゴーグル等で極力予防に努めること。帰宅したら、マスクはもったいないが、いちいち廃棄する方がいいだろう。当然手をよく洗い、うがいをする、絶対である。

ヒトヒト感染がパンデミックになる危険性が国内にも起こった時は、正に緊急事態として、適切なる行動をとらなければならないが、現時点では、あまり、ヒステリックな対応をとる必要も無いと思われる。

メキシコや米国、欧州などで感染が拡大する豚インフルエンザがアジア地域にも波及するのは時間の問題との見方が強まる中、アジア諸国は28日、感染予防対策を本格化させた。中国や東南アジアでは衛生・医療事情の劣悪な地域も多く、いったんウイルスが侵入すれば、「パンデミック(世界的大流行)」が到来するとの危機感が強い。2003年に大流行した新型肺炎(SARS)を教訓に対応を急いでいる。

SARSで約350人が死亡した中国。温家宝首相が28日、会議を開き、「警戒を怠ってはならない」と指示。現時点で豚インフルエンザの感染や疑い例は確認されていないが、衛生省は世界保健機関(WHO)に対し、疑われる症例数件を調査中であると報告した。隣接する香港では感染の疑いがある4人の患者が検査を受けた。

台湾はメキシコへの不要不急の渡航を禁止。医療機関に対しては、発症が疑われた場合、24時間以内に衛生署(衛生省)に通報するよう義務付けた。

メキシコや米国を訪れた旅行者らがウイルスを持ち込む懸念が強いが、韓国ではメキシコに旅行した女性が、感染の可能性が高い「推定患者」と確認された。タイでもメキシコから帰国し、発熱を訴えた女性が隔離治療を受けている。

シンガポールでは米カリフォルニア州からの米国人旅行者ら2人を隔離、検査を続けており、チャンギ国際空港は27日から到着客に対する遠隔体温測定を全面的に開始。SARSの際には密室の飛行機内が感染拡大の温床となったが、各国の空港は水際対策を徹底している。

(以上4月28日21時41分配信 時事通信)

日本はゴールデンウィークの真っ只中、いたるところで、人、人の大混乱が予測される。幸い国内感染は報告されていないが、一つ間違えるとえらいことになりかねない。